

特集

診断に役立つ! 教育で使える!

フィジカル・エポニム!

身体所見に名を残す
レジェンドたちの技と思考

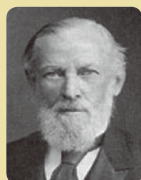
企画 志水太郎

*掲載はエポニムのアルファベット順になっています。



05

Gowers徴候 | 田中太平
William Richard Gowers
(1845~1915)



小児の「神経診察」は
いつから始まる?
>>> 1335

06

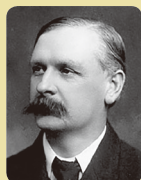
Heberden結節 | 陶山恭博・岸本暢将
William Heberden
(1710~1801)



「手指関節」の診察におい
て重要なことは?
>>> 1340

07

Hill徴候 | 猪飼浩樹
Leonard Hill
(1866~1952)



身体診察において、
「血圧測定」のポイントは?
>>> 1347

12

Valsalva手技 | 原田侑典
Antonio Maria Valsalva
(1666~1723)



ベッドサイドで
「自律神経機能」を評価する
には、どうすればよいか?
>>> 1375

「エポニム (eponym)」とは、人名に因んで命名された言葉のことです。医学には多数のエポニムがありますが、それらは、現代医学をつくり上げてきた偉大な先達の存在を、私たちに物語っています。今に名を残すメディカル・エポニムは、その発見・開発者が、さまざまな臨床経験をもとに、思考錯誤を重ねたうえで発表し、それが軸となって、歴史の風化を受けずに、または受けながらも継承されてきたものです。

本特集では、エポニムを「フィジカル（身体所見）」に絞って取り上げました。その身体所見あるいは身体診察の技術は、いかに発見・開発され、いかなる臨床的意義をもつものなのか？ それを改めてひもとくことは、病変に的確に迫り、身体の内部やメカニズムを“想像しながら”身体所見をとるといふ、診察技術上達の核心に迫る助けとなるはずです。フィジカル・エポニムの歴史を通して、その医師の人生や情熱に触れることは、現代の私たちが実際に用いている診察技術に深みと愛情をも与えることでしょう。

先達の知恵と情熱を受け継ぎ、検査に押されがちな身体診察の技術を保護する。本特集が、その一助となれば幸いです。次の世代への伝承（教育）にも、ぜひお役立てください。



03

Blumberg徴候 | 徳田安春
Jacob Moritz Blumberg
(1873~1955)



「Blumberg徴候」とは何か？
考えられる疾患は？
また、これを提唱した人は？
>>> 1325

09

Kehr徴候 | 清田雅智
Hans Kehr
(1862~1916)



「左肩に痛みがあるものの、
肩関節には所見がない時」
に考えることは？
>>> 1358



02

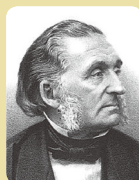
Babinski徴候 | 井口正寛
Joseph Babinski
(1857~1932)



「Babinski徴候陰性」という
表現が好ましくないのは
なぜか？
>>> 1318

11

Trousseau徴候 | 平島 修
Armand Trousseau
(1801~1867)

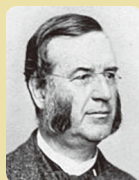


「悪性腫瘍」を診断した時に、
気をつけるべき徴候は？
>>> 1370



01

Austin Flint雑音 | 山崎直仁
Austin Flint
(1812~1886)



「Austin Flint雑音」を
聴取しようとする時の
ポイントは？
>>> 1314

04

Frank徴候 | 成田 雅
Sanders Thalheimer Frank
(1938~1997)



「冠動脈疾患」のリスク因子
を示唆する身体所見は？
>>> 1330

08

Janeway病変 | 志水太郎
Edward Gamaliel Janeway
(1841~1911)



「心臓」の身体診察に
おいて重要なことは？
>>> 1353

10

Murphy徴候 | 丸山 尊・上田剛士
John Benjamin Murphy
(1857~1916)



「胆石症」「胆嚢炎」の
身体診察で重要なことは？
>>> 1365